

平成 11 年 5 月に開通した西瀬戸自動車道「しまなみ海道」で結ばれた大島、伯方島、大三島をもつ愛媛県内の「しまなみ地域」は、「日本のエーゲ海」とも称されるほどの美しい景観を有している。

地域振興に向けた自転車ツアーの開発

しまなみ地域では、地域住民によって、過疎、高齢化、農業・漁業での担い手不足といった課題解決に向けた振興策が検討されてきた。そして、組織的に活動を展開しようと、平成 20 年 6 月に、島民主体による「しまなみスローサイクリング協議会」（以下「協議会」）が発足し、サイクリング・ロードが整備されている「しまなみ海道」の特性と、島嶼部のさまざまな観光資源を活用し、島外から訪れるサイクリストを対象とした滞在型ツアーの開発が進められている。

「スロー」とは人と人、モノ、自然等との「つながり・思いやり」に価値を置き、じっくりと豊かな生活を熟成させていく物の見方、地域の文化を意味している。協議会は、「つながり・思いやり」に価値を置き、豊かな暮らしを守ってきた島民を中心に、そうした暮らしぶりに共感した島外住民など約 50 名のメンバーで構成されている。そして、バス等で通過するだけの観光とは異なり、自転車ですぐりと 3 つの島を巡って、それぞれの特色と魅力を堪能し、豊かな生活を実感してもらおう旅のスタイルの普及を図っている。

モデルコースの作成と

ブログでの情報発信

まず、平成 17 年から、伯方島、大三島、大島の順に、島民たちのアイデアを盛り込んだサイクリングのモデルコースづくりが行われた。

次に、外からの来訪者を増やすための取り組みとして、コースのなかに点在する地域資源の魅力を「風」、「路地裏」、「暮らし」や「人」といった切り口で、ブログを通じて全国に情報発信する取り組みに着手した。



地域の魅力を伝えるために写真取材の基本を学習

平成 19 年には、県外から希望者を募り、2泊3日のモニターツアーを実施した。このときのサイクリストの要望をきっかけに、地元の食材を活かした「二輪弁」（サイクリストが気に入った場所で食べられる弁当）の開発に取り組んだ。

これまでの経緯と成果について、協議会設立前から、支援にかかわっている「今治 NPO サポートセンター」の山本優子さんは、次のように述べている。

「モデルコースづくりの際は、各島の商工会議所青年部や自治会、婦人会や PTA などに声をかけ、ワークショップを繰り返し行いました。その後のブログでの情報発信、サイクリングマップづくりなどは、島の有志が自発的に集まりました。こうした丁寧な話し合いにより、島民のみなさんの活動にける想いや相互のつながりが育まれてきたことが、現在の成果につながっています」。

地域ビジネスとしての展開をめざして

「しまなみスローサイクリング」の活動の過程で、島民自らが観光資源の掘り起こしを行う作業は、地域の歴史や伝統を再発見し、自分たちが受け継いできた文化や暮らしの豊かさを、後世に伝えていくことが大事だという、島民の気づきにもつながった。

「しまなみ海道」は、今年で開通 10 周年を迎え、記念イベントが行われているが、一過性の出来事で終わらせるのではなく、こうしたイベントを次の 10 年にどのようにつなげていくかが重要といえる。

そして、「しまなみスローサイクリング協議会」が、これから次の段階の取り組みを展開していくためには、ボランティアな精神を活かしつつ、魅力的なツアー・プログラムの企画開発等を行い、地域ビジネスとして成立させていくことも必要となる。

しかしながら、活動への想いやかかわり方は人それぞれであるため、それぞれのスタンスを尊重しつつ、さまざまな参加の機会をつくっていくことがこれからの課題といえる。



しまなみスローサイクリング協議会 幹事長 赤尾 卓 さん

● 事例 1 ●

観光資源を活用した 住民主体の地域振興

しまなみスローサイクリング協議会
【愛媛県今治市】

<http://blog.canpan.info/shimanami/>



「二輪弁」のイメージイラスト



モデルコースを走り、観光ポイントを検証

穏やかな瀬戸内海をバックに撮影ロケ

映像作品の誘致と、まちの再生をめざして

アジア・フィルム・ネットワーク（以下、「AFN」）は、映像作品制作の誘致と種々の撮影支援をとおして、市民に地域の魅力を再発見してもらいながら、まちづくりへの参画を促進し、地域の活性化を図っているNPO法人である。

平成17年に公開された映画作品『世界の中心で、愛をさけぶ』をはじめ、さまざまな映画やテレビ番組、CMなどの撮影支援で数多くの実績を重ねてきた。

AFNの主な活動である「フィルム・コミッション事業」では、撮影場所の事前調査が必要だが、これには、市民の協力が欠かせない。誰にでもできる気軽なものであることを市民に紹介し、地域の魅力の探し方を伝えて協力を募っている。

この事業の意義について、代表理事の福岡晋也さんは次のように述べている。「ロケ地としての愛媛の魅力は、海も山も町も近距離に集約されていることと、手つかずの自然が豊富に残っていることです。こうした地域に映像撮影が招致され、愛媛や松山の地域資源が、映画やテレビに露出されることは、市民たちの喜びや誇りにつながっています」。また、県外からやって来るロケ隊の滞在に伴う経済効果や、映画ファンを中心とした集客・観光への効果も期待されている。

地域づくり事業として行っている「道後旧歓楽街にぎわい再生事業」では、市民から良くない印象でみられていた「ネオン坂歓楽街」付近を、親しみのもてる場にすることをめざしている。そのために、ネオン坂周辺の住宅や旅館、スナックなどを一軒一軒回ってインタビューし、市民の声を吸い上げるなど、地域に密着した取り組みを進めており、ある町内会ではAFNの役員が「町内会長をやってくれないか」と頼まれたこともあったという。

さらに、かつての遊郭であった「朝日楼」を新たな観光資源として蘇らせることを検討し、その活用方法を探るワークショップ等の企画・運営も行った。また、手づくり品の販売やライブなどのイベントを行う「道後・いっぺんさん」の開催を通じて、出店者や来場者の交流を深め、地域のイメージ向上に努めている。

そして、子どもたちが地域を題材に物語づくりを体験する「こども映画塾」は大きな反響を得ており、事業の大きな柱の一つとなっている。地域に向かい、発見したこと、調べた



「道後・いっぺんさん」のにぎわい



こと、想像したことなどを盛り込んだ物語を創作することで、子どもたちの創造力や発想力を育み、地域の魅力を再発見する機会を提供している。

若者たちの参画を促すインターンシップ制度

AFNでは、マンパワーの確保のため、設立以来、大学生を対象としたインターンシップ制度を取り入れ、毎年、5～10名程度の学生たちを受け入れている。

学生には、「こども映画塾」や「道後・いっぺんさん」などの事業において、企画からプレゼンテーション、運営までを任せている。必要なレクチャーやフォローは行うが、基本的には本人の自主性に委ねて、責任をもって取り組んでもらっている。

こうしたかわりもあって、毎年数名がインターン終了後も、AFNの活動に参加してくれている。また、東京で映画製作に携わっているメンバーや、出身地に戻ってまちづくり活動を始めたメンバーなども出ている。

かつてインターンシップで活動に参加し、現在は理事として運営を支えている倉谷香織さんは、次のように述べている。

「AFNの方々は、人を巻き込む力に長けています。私もグイグイと引っ張られ、気がつけば活動の渦中に引き込まれていました。議論の際に、学生扱いせず、一人の人間として意見をちゃんと聞いてくれたことが強く印象に残っています」。

事業の活性化に向けた今後の抱負

法人設立から8年を経て、地域のなかでの知名度も高まってきたAFNにとって、今後の課題は、「フィルム・コミッション事業」を、すでに用意された企画に対応する“待ち”の事業から、映像制作の企画・脚本段階から参画していくスタイルへと転換していくことである。

同時に、さまざまなまちづくり支援事業をもとに、若者たちや子どもたちの感性を育み、豊かな人間関係を磨いていくことや、これまでに築きあげたネットワークを活かした地域づくり事業をさらに展開していきたいと考えている。



特定非営利法人
アジア・フィルム・
ネットワーク
ふくおかしんや
代表理事 福岡晋也さん

● 事例2 ● 映像製作の支援を 核にした 魅力ある地域づくり

特定非営利法人
アジア・フィルム・ネットワーク
【愛媛県松山市】
<http://www.asiafilm.info>

愛媛県の最南端に位置する愛南町^{あいなんちょう}は、平成 16 年 10 月に南宇和郡の旧 5 町村^{うちゅうみむら みしようちょう じょうへんちよう いっぽんまつちよう にし}（内海村、御荘町、城辺町、一本松町、西海町^{うみちよう}）が合併して誕生した。愛南町ボランティア連絡会（以下、「連絡会」）は、平成 4 年に設立された旧城辺町ボランティア連絡会を前身とし、高齢者支援、障害者支援、子育て支援、河川美化、点訳や手話のグループなど多彩な分野で活動する 12 団体で構成されている。

商店街の空き店舗を利用した活動拠点

合併前、旧城辺町ボランティア連絡会では、社協の協力により、町の施設のなかの一室を提供してもらって活動していた。しかし、たびたび場所の変更を余儀なくされたことなどから、借り物の場所ではなく、自前の拠点をもちたいという機運が高まっていた。

そこで、旧城辺町ボランティア連絡会は、合併前の城辺町に陳情書を提出し、「まちの空き店舗を活用したボランティア活動の拠点と、高齢者や子ども、障害者など地域住民の交流の場をつくり、まちの活性化を図りたい」と働きかけた。

このとき、「拠点はきちんと自分たちで運営し、改修も自分たちで行う」との姿勢を示したことで、行政に好意的に受けとめられ、さまざまな協力を得ることができた。また、自分たちの想いや活動を大事にしたいとの考えから、従来は社協にあった連絡会の事務局も自分たちで担うこととした。

拠点は、誰もが利用しやすく、オープンな場所が良いと考え、地域の中心街にある商店街の空き店舗に着目した。さらに、連絡会は、「より多くの人々の想いを集めること」、「拠点とまちが共存すること」が大事と考え、行政や社協をはじめ、商工会や議員、医療機関などに呼びかけ、拠点の設置に向けて話し合う場もった。空き店舗探し等、容易でない問題もあったが、連絡会の長年の地道な活動によって得られた地域の信頼やネットワークのおかげで乗り越えることができた。

そして、平成 16 年 8 月に、地域交流センター「プラザじょうへん」が誕生した。センターでは週 4 回（日、月、火、金の 11 時～16 時まで）の交流サロンが開設されて、乳幼児から高齢者、障害のある人も思い思いに楽しい時間を過ごしており、ボランティア団体によるイベントやワークショップ、



「プラザじょうへん」で行われている子育て座談会

セミナーなども行われている。

誰もが住みよいまちづくりをめざして

「プラザじょうへん」は 70 坪の広さがあるが、内部には 35 坪の間仕切りのないオープンスペースがある。連絡会の団体同士が、自分たちの活動をしながら、他の団体の活動の様子を見ることができるようになり、団体同士で助け合う関係が強まった。さらに、毎月 1 回行われる運営会議の場で、お互いの状況を確認しつつ、それぞれの団体がまちづくりへの想いを共有し、「無理をせずできるときにできることをする」ように心がけている。

「プラザじょうへん」では、かつては引きこもりがちだった 10 代の女性 2 人が、留守番役を担っている。連絡会の事務局長の兵頭朝美^{ひょうとうあさみ}さんは、次のように述べている。「いつでも 2 人がいてくれて、しかも世話しすぎず、いい意味で放っておいてくれるおかげで、みな気軽に来ることができるスペースになった。障害のある人がふらっと来て昼寝をして帰ることもある」。

平成 17 年 4 月からは、連絡会に属する子育て支援グループが、愛南町からの委託を受けて、「プラザじょうへん」で子育て支援事業の「つどいの広場」を開設した。常時 2 名の育児アドバイザーが加わり、乳幼児を抱える若い母親の安心できる居場所、さまざまな人と接する場となっている。昨年度は合わせて 337 日間開設し、7,120 名の利用者があったという。

連絡会では、今後も「プラザじょうへん」を地域の核として、誰もが住みよいまちづくりをすすめ、「共に暮らすまち 愛南」をめざしていきたいと考えている。

● 事例 3 ●

ボランティア活動の 拠点確保と 地域の居場所づくり

愛南町ボランティア連絡会
【愛媛県愛南町】
<http://vrplaza.sakura.ne.jp/>



多くの人が集い、楽しむ「夏祭りライブ」



愛南町ボランティア連絡会
ひょうどうあさみ
事務局長 兵頭朝美 さん